

旭川文学資料友の会
友の会通信

第 8 号

旭川文学資料友の会
旭川常磐公園
旭川市常磐館内
tel 22-3310(228)

NPO 承認、設立、を記念して

会長 相川 正志



昨年は長年の懸案であった旭川文学資料館が開設された。そして今年には旭川文学資料友の会にとって記念すべき今までの地道な活動が認められた節目の年であった。

第一に今年六月、井上靖記念館で第十三回旭川文学資料企画展として旭川の文学を育んだ「佐藤喜一展」が開催され成功裡に終了した事。

第二に十月一日から「旭川・文学の一二〇年展」が常設の第一展示室に次いで第二展示室で開催され、これまでの小熊秀雄賞の歴代受賞者と並んで旭川開村以来明治時代からの収集・整理された資料が年代順に展示された。さらに現在旭川で活動されている創作、詩、短歌、俳句、川柳、児童文学などの各ジャンルの作品がパネルで展示され、十月三十一日までに約八百人の市民が訪れ成功裡に終了した事である。

さらに特記すべきは会期中の十月十六日室蘭文芸協会員 16 名との交流会が行われた。室蘭文芸協会とは平成十五年十月、将来の旭川文学館の参考として訪れた時お世話になった「室蘭

港の文学館」の室蘭文芸協会の会員の方々である。それ以来の交流であり今回の特別展示を記念して室蘭から来旭され展示に就いての賛辞の言葉を頂いた。なお、室蘭文芸協会と当会の繋がりは平成十八年の第九回企画展・旭川ゆかりの作家「板東三百展」への資料の提供など、多大の協力をいただいた以来の交流であり、現在の第一展示室の板東三百のコーナーはその全面的協力の賜物である。

第三に常磐館の正面玄関に大きな「旭川文学資料館」という看板が掲げられた事。今まで場所を聞かれる度に「川のおもしろ館」の隣の常磐館内とか、常磐公園内の元青少年科学館などと説明させられていたが、この看板によって正式に市民に周知され活用されることになったことは望外の慶びであった。



第四にもう一つの大きな喜び、それは長年の懸案であった特定非営利活動法人即ち NPO 法人として十一月に正式に承認されたことである。このことはこれまでの会が収集・整理・展示、企画展以外多くの活動を発展させる可能性を示している。例えば、市民の善意により寄贈された多くの本がより有効に活用し得る可能性、そして全国、全道の文学館や資料館との交流を通じて、知られざる郷里の作家の研究が幅広く出来ること、また予算不足の学校の図書室や図書館、施設などにもネットを通じての必要な本の再活用の提供など可能性が広がる。活字離れが進んでいると言われている現代、郷里の作家の作品に触れることにより少しでも改善に役に立つことを期待したい。また第二展示室の活用により現在活動している各ジャンルの展示の継続

により新しい文学愛好家の開拓による活用など夢は大きく広がる。

第五に十一月三日、平成二十二年度旭川文化功労賞の文芸部門で当会の佐藤比左良副会長が長年の、郷土の生んだ「詩人今野大力」(平成十九年企画展)の研究が高く評価され受賞されたことである。心からお祝いを申し上げます

この平成十三年から九年間、収集、整理展示パネルの作成、作品の展示などの作業はすべて会員のボランティアで行われている。会員皆様の長年の地道な活動、ご労苦に対しお礼を申し上げます。また蔵書の提供、書籍の書架、展示ケースなどの提供を頂いた多くの市民、商店、そして陰に陽にこの活動を支えて頂いた多くの市民の方々に厚く御礼申し上げます。



お陰様でこの九年間、当初の目的として掲げた旭川文学資料館の設立、そして NPO 法人の立ち上げと二つの大目標を達成出来た。

この九年の間、館の創立や維持管理などに絶大な協力を頂いた行政に対して心からの御礼を申し上げますと共に今後も変わらずのご支援をお願いいたします。

今後も館の活動「昔を残し今を残し未来に続ける」重要な仕事を通じて、旭川の文化の啓蒙と発展に寄与することを誓い稿を終えます。

平成二十二年十月一〜三十一日開催
「旭川文学の120年展」を終えて

当館の特別企画展「旭川・文学の120年展」に参加された各ジャンルの方々に感想をいただきました。

今後への期待をこめて

石川 郁夫〔創作〕

「旭川文学の120年展」が終わった。文学資料友の会のこれまでの営為が結実したものとして、大きな意義のある展示であった。

展示は、120年を10年刻みに時系列で案分する方法で示されていて、それは確かに順当で一番分かり易い展示方法ではあった。だが、見終わって思うことはある。等分に配置された10年には、当然のこととして、活動内容の濃淡があり過ぎるという思いだ。今回は、これが最良の方法であったらうと認めたくえで言うのだが、旭川において小説という創作を意識的に自覚し、この地で本格的に活動を始め、それが北海道・日本の文学水準に拮抗する作品を生み始めたのは戦後である。さらに言えば昭和30年代からである。だから、乱暴を承知で言えば、他の部分を圧縮、あるいは捨てても“冬涛”を先頭に“朔風・風土・文芸北国・愚神群・VITA”といった雑誌に依拠し、あるいはその周辺で活動した人々をこそ、展示の核にすえてほしかったという思いが残った。今後への期待と受け取ってくださってもいい。

ぼくが今後に期待するものについて具体的に言えば、文学資料室は単に個人のあるいは団体の残した足跡の展示、顕彰ではなく、可能な限

り、この展示のコンセプトはここにあるのだ、という主張を明らかにした焦点化されたものにシフトを移して欲しい。

例えば、木野工であれば、芥川・直木賞に六回も候補に上がった作家でこのような資料があると展示・陳列するだけでなく、私たちが彼を私たちの郷土が産んだ財産だと評価するのは、ここにあるのだという理念が示される展示。司野道輔ならば、戦前の日本国の体制を拒絶、戦後の自由主義かぶれ、左がかった民主主義の流れの持つまやかしを峻烈に批判する作家としての視座に光を当てる。高野斗志美ならば、そのアンガージュマンの内実に、三好丈夫であれば、先住民であるアイヌの全てを収奪し、同化の美名のもとで圧殺してきた和人である北海道人(日本人)の罪業を告発し贖罪を迫り再生の道すじを考えようとした、その苦闘に焦点をあてた展示を考えるとといった具合に。「開村120年」という考えそのものを三好は「アイヌ収奪完結120年」か、と笑いとばすかも知れない。そのような作家も含めて、その意味するところを問うのは重要なことだ、とぼくは思っている。文学資料友の会がこれまで地道に続けてきた活動とその意味が認められ、遅過ぎ、不十分過ぎる不満はともかく、少しずつ確実に認知され、市民の共有財産として位置づけられて来つつあることを心から喜びたい。

そのうえで、それらを継承し、新たな地平を切り開く文化の創造者、発信者としての市民へ変容していくための作業を、他ならぬ市民であるぼくらは引受けねばならない。との思いが強い。資料室は、その中核になるだろう。

まずは、先人の残した作品を、一人でも多くの人達が楽しんで読むことを希んでいる。

すばらしかった120年展

庄司 昭志登〔川柳〕

大雪山系に脈うつ文学の足跡、旭川・文学の120年展」が盛会裡に終わり、旭川文学資料友の会の方々をはじめ、多くの関係者のご努力に感謝申し上げます。

数年前、旭川文化団体協議会(文団協)が毎年発行している『旭川市民文芸』の編集会議に、今回の展示会場である「旭川市常磐館」を訪れた時、収集された山のような資料を目にしてびっくりしました。

「こんなに沢山の資料があつて、整理するのが大変だなあ」と、その時は思っていました。

退職後、旭川に移り住んで日が浅い私でしたので、恥ずかしい事ですが、こういう会のあることを知りませんでした。

それが昨年、文学資料館がオープンし、そして、今回のような素晴らしい120年展が開催されました。

2001年から収集・整理にあたってきたとの事、しかも、陳列ケースなどは会社や商店などから寄贈されたものと聞いてびっくりしました。

それぞれのコーナーに配置された陳列ケースやパネルなどが不揃いのなかで、参加団体がそれらを上手に工夫して展示陳列し、手作りの暖かい展示会場になっていました。

そのコーナーの一角に、私たち川柳団体の展示個所があります。旭川にはいくつかの川柳団体があり、今回は「旭川原流社」、「教職員互助会川柳同好会」、「旭川川柳社」の三団体の展示がありました。

「原流社」にはベテランの方々が多く、あとの二団体は退職した後に川柳を始められた方が多いようです。それぞれに作風が違うのはどの分野でも同じ事だと思います。

私たちの「旭川川柳社」は歴史は古いのですが、ベテランの方はほんの数名です。あとはみんな十年以下の同人で、その多くは退職してか始めた人たちです。

お互いに切磋琢磨し、道内の川柳社に武者修行に出かけたり、川柳大会に投句したりしながら努力しているところです。文団協の春の展示会や今回のような展示会にも進んで参加しております。

9年間の資料収集・整理、今回の「旭川・文学の120年展」の開催、本当にご苦勞様でした。旭川文学資料友の会のますますのご発展を祈念いたします。



旭川川柳社句会風景



120年展川柳コーナーでの飾り付けを終えて。作品を前に記念スナップの会員有志

120年展に参加して

福田 洋子(児童文学)

子どもの文学とは、生きる希望を伝えるもの。三十数年間こどもの本に関わり続けてきて、この思いは今も揺らぐことなく私の胸に在ります。そして小松秀雄の詩の一節が思い浮かんできます。

——この辺りでは自然からも人間からも伐り出すことのできるものが残っていないそうだと

私はそれを新芽も青く柔らかく 行列

をつくって生えている 小松の群をみてそう思った——

||『小松秀雄詩撰/星の光のように』小松の新芽 北海道に帰って” ||より

この詩は、小松最晩年の1940年に書かれました。久しぶりに故郷に帰り北国の澄んだ空気に包まれた詩人が、そのみずみずしい自然の中に未来への希望を託した詩です。

七〇年経って、詩人が予感したように”この辺りでは”希望の文学、子どもの文学に関わる仕事をする作家たちが輩出しています。あべ弘士、堀川真、相川公司、山村輝夫、岩田道夫、工藤有為子。

小松は、20才から27才まで旭川新聞の記者として、新聞に童話や詩を発表し童話「焼かれた魚」もその時代に書かれています。

あべ弘士が10代の頃から、画家を今生の仕事と決意し、1972年から1996年までの24年間旭山動物園の飼育係として働き、多くの動物達の生と死をみつめる日々の中から絵本作家あべ弘士として誕生したのが1981年でした。1981年の処女作「旭山動物園日誌」(ミル

工房)から2010年の今日まで200冊近い作品を発表してきました。あべ弘士にいつか小熊の世界を描いて欲しいと思います。

昨年と今年あべ弘士の絵で「3びきのくま」(フェリシモ出版)「世界がぼくらをまっけてる！」(講談社)を上梓した工藤有為子は、1977年生まれの若く美しい童話作家です。この春から東京で働いています。彼女の魂の故郷はここ旭川です。「3びきのくま」では、くまの留守にくまの家を訪れる女の子を月の精とし、くま達はリズムカルで響きが美しいアイヌ語を話します。豊かな想像力、力の持主でもある彼女がどう花開いていくのか楽しみに応援したいと思います。

紋別出身の堀川真は、1992年28才の時に「じかきむしのぶん」(文・松竹いね子/福音館書店)で絵本画家としてデビューしました。

10年余り絵の分野でその豊かな天分を発揮してきましたが2006年「北海道わくわく地



図絵本」(北海道新聞社)2007年「あかいじどうしゃよんまるさん」(福音館書店)でテキストも自ら書くようになりました。これからも自分の暮らしの中の楽しいコト、面白いコトをお話して紡いでいってくださるでしょう。

未来への希望を小松の新芽に託して詩った小松秀雄。その青く柔らかい芽が故郷で逞しく伸びやかに息づいているのを詩人は見守っているにちがいないありません。

旭川文学資料館について

宮川 達二〔詩〕

〈旭川文学資料館と私〉

私は、高校生の頃から旭川と縁の深い詩人・小熊秀雄の詩を読み始め、その後彼の人生を調べて四十年余りになる。特に近年、小熊の詩と人生をより深く調べている。

昨年は、小熊の少年時代の足跡を辿って樺太(現在のサハリン)を訪ねた。小熊の詩に現れた樺太、特に小熊が「故郷」と呼ぶ場所が主に樺太であったという事を、実際に樺太の地を踏んでより深く認識できたように思う。また毎年一〜二回東京への旅に出る。小熊秀雄が詩人として十二年間、彼の人生で最も長く生活し、詩作した東京の足跡を調査している。彼が長く住んだ池袋、そして関連した護国寺、早稲田、新宿、御茶ノ水、本郷、新宿、上野、銀座、千駄ヶ谷などへ足を向ける。次々と新しい事実が浮かび上がってくる。

私は、しばしば、旭川の常磐館にある旭川文学資料館を訪ねて、小熊および周辺の関連の本や資料を見せて頂く。文学資料館の豊富な本と資料、そして、文学資料館に常駐するスタッフの責任者沓澤さん及び担当の方々には常にお世話になっている。質問や疑問を明確に持つて文学資料室を訪ねれば、その場で殆どのが解決できる。本や資料がすぐに見つかる。今後も続く小熊秀雄関連の私の調査は、継続して旭川文学資料館の方々にご協力頂いて行くことになるだろう。

〈旭川文学資料館開設について〉

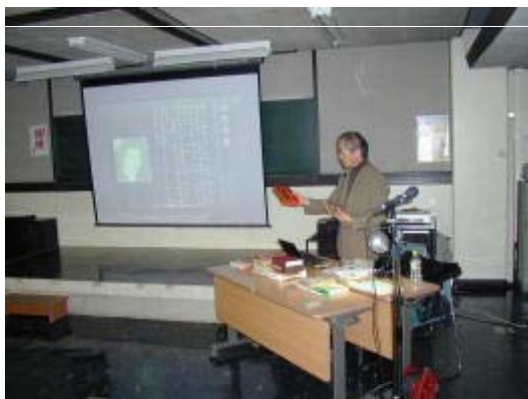
昨年5月に多くのボランティアの方々の努力下旭川文学資料館が開設となった。今野大力、小熊秀雄、板東三百等の詩、小説はもちろん、短歌、

俳句、川柳、アイヌ文学では知里幸恵の資料が展示され、旭川の文学の歴史を初めて鳥瞰できるようになった。道内には、主要なものとして札幌には北海道文学館、小樽には小樽文学館、函館にも函館市文学館があるだけに、旭川に個人名の付いた文学館が2つあるだけでは残念であると思っていた。

そして、今年10月、旭川開基120年を記念して行われた「旭川・文学の120年展」が開催されるにあたって旭川文学資料館は大きくスペースを広げた。開館の日に、今までの何倍かになった素晴らしい展示を見て、私は、大きな感動を覚えた。資料の豊かさはもちろん、旭川には、文学を愛する人々がこれほどにも情熱を傾ける場所がある。

旭川文学資料館の要請により、この記念講演の一つとして、私は、詩の部門で

「小熊秀雄と二人の女流文学者―湯浅芳子と宮本百合子との出会い―」というタイトルの講演を担当させて頂いた。小熊の東京に於ける多くの友人たちとの交流は、明確ではない部分が沢山ある。旭川文学資料館の人々や資料に助けられながら、詩人小熊秀雄の生涯がより鮮明な像を結ぶように、私は今後も研鑽を積むつもりである。



120年展に参加して思うこと

岡 莊司〔俳句〕

旭川文学資料友の会の基本方針の「散逸しがちな文学資料を収集、展示、保存し……」に相応しい行事を設定して頂き、俳句ジャンルの一員として深く感謝。友の会メンバーが、連日資料を展示する全力投球。俳句11結社の仲間が一致団結し、実のある展示ができたと思う。短冊、色紙、句碑からの作品

夏霧に髪濡らしきて美しき

藤川碧魚

ななかまど十三葉の露涼し

西本一都

女貞花より現はるる通ひ湯女

坂本夕カ女

もの芽の雪降るときも旺んなり

伊藤凍魚

薬えて卯つ木遺愛の花もてり

伊藤雪女

桔梗濃し見てゐる母を見てゐたり

岡 莊司

ぼくぼくと歩いて見せよ瓜の馬

藤田旭山

夫婦滝すくなき水を分かちあふ

河村岳葉

雲流れ秋は静かに行きつゝあり

大塚千々二

花屑にまみれし土をうらがへす

塩野谷秋風

零下三十度川あたたかく村に着く

北見弟花

折鶴の尾のさす天が雪降らす

後藤軒太郎

薔薇一枝昇る透明なエレベーター

館川京二

ほつくとゆく秋の灯が山に点き

高橋貞俊

霧茫茫源流北にふりかかる

榊原雪毬子

独歩廻る遠き記憶の渦の中

澤田潤生

鳶のふく遠音ながるる稲筵

奥山 博

夕空に崩れ残りの雲の峰

清崎敏郎

月光を溯りゆく虫のこゑ

鈴木貞雄

朝顔よく咲く凡医に足りて働けば

新明紫明

芙蓉実に三日読まねば心飢う

新明セツ子

一網を天に打つごと帰雁かな

辰巳奈優美

花房の重りの翳るななかまど

深谷雄大

句碑の写真・作品・所在地などを克明に記し、パネル化してほしい。(各結社で)

句集については、各結社で保存することも大切であるが、文学資料館に一括寄贈し、広く旭川市民に限らず、道内外の方々に開放しては：。また句報については、一年単位でまとめ、公開してほしい。

写真については、大変貴重なものが多いので、パネル化が必要に思われる。(各結社で)。短冊、色紙については、それぞれの裏面に、「作品」「作者」「所属」「寄贈者名」などを記し、結社単位で、文学資料館に寄贈して頂き、有意義に活用できないだろうか。

講演については、若干準備不足であったことを反省。飯田龍太の作品の解説に時間を取る必要があった。秋、冬季の作品を二十句程度を OHP を使い、もっと視覚的方法で説明することが効果的であったと思う。

ジャンル単独で実施する場合の構想は後日記したいと思う。



一一〇年展に参加して

竹内 利和〔短歌〕

「文学資料友の会」から「一一〇年展」の会議実施の案内状が送付されて来たのが五月の末だった。何が始まるのかイメージもできないまま第一回会議(6/16)に出席。

雲を掴むような話も、友の会の皆さんの熱心な説明や展示のイメージを聞いているうちに、身近なものに感じはじめる。

わが歌人クラブは超結社、個人参加の団体であるが、各結社、グループに属している会員も多いことから、各グループ(結社)と責任者の確認を行い、一一〇年展への参加協力の依頼を開始する。

確認できた十三グループ(結社)のうち、八グループ(結社)が展示に参加することになり、第二回会議(7/10)に臨む。

この会議で、各団体の展示スペースが具体的にになり、短歌の八グループ(結社)が九月末に展示作業を実施。十月の展示会場の一角を飾ることになり、旭川文学のひとつに加わったことを実感するときでもあった。

そんななか私の所属するときわ短歌会で「丘上」に逢ひしこと無き師の歌碑あり孝虎の名を指でなぞれり」と、若い会員の作品に出会った。

北方短歌の会員時代、私も建立に立ち会った小林孝虎先生の歌碑のひとつに、今初めて出会った心を動かされるひとがいる。改めて歌碑を訪ねて現況を把握し、建立のエピソードなども掘り起こしてみようと考えた。

このような訳で、第三回会議(8/6)では私自身が記念講演をすることになっていくので

ある。演題も「旭川の歌碑をめぐる」。

さて、その準備にとりかかるが、特に友の会の東延江さんの惜しみない協力を得て関連の資料提供も頂き、これを本に自分の足で歌碑を巡ることにする。

天候や諸般の都合で行動を始めたのは十月に入っていた。何とか五日間で市内の歌碑十九基を巡り二百五十八枚の写真を撮った。

講演ではこれを①スライドにして公開しながら話をする一方、②講演資料として小冊子にも纏めることにした。その準備も思いの外時間がかかり、編集に苦戦したものである。

講演会当日、友の会の杏澤さんの手を拝借して発表準備を終え、入場者を待つ。

西勝副会長(歌人クラブ)の司会で開会、講師紹介を受け、スライドを映写しながら歌碑の状況、碑面歌、歌碑建立のエピソードも交えて話を進める。

会場の皆さんは、熱心に聞いて呉れ、夢中になって十九基の歌碑について話を進めた。

終了後、講演会の入場者も多く、皆さんが興味深く聞いて下さった事などを聞き、お出で下さった皆さん、支援頂いた友の会の皆さんに感謝しております。同時に、自分でもこの機会を得て良かったと実感しています。

皆さん、どうも有難うございました。



文学を愛する交流の花が咲いて 室蘭文芸協会メンバー団体で来旭

室蘭文芸協会の皆様十六名が十月十六日に来館されました。展示室ご観覧後、地階の交流室で友の会メンバーとお茶を飲みながら談笑。夜は居酒屋炬燵のユーカラで懇親会をもちました。室蘭市港の文学館の運営方法を目標にしてきた私たち友の会としては有意義なひとときでした。

『旭川文学資料友の会』の皆様へ

室蘭文芸協会 事務局長 三木 善継

去る一〇月一六日、貴会を訪問した折には、会員の皆様からお心尽くしのご対応をいただきまして誠に有難うございました。篤く御礼を申し上げます。

室蘭文芸協会が貴会との交流会を事業として取り組んだいきさつについて語らせていただくと思います。私も、以前には「文学散歩」という文学にゆかりのある場所を訪れる一泊二日程度の小旅行を行事に組み込んでおりました。しかし、昨年度から単に文学館や文学碑などを見て回るだけのことで不十分ではないのかという反省から、道内の文芸関連の諸団体との交流も行う行事にしようという方針を立てたわけです。ちなみに、昨年度は『函館文学学校』の皆様との交流を行わせていただいております。

このような方針に基づき行事の立案を考えておりました昨年の春、『北海道詩人協会』の総会が室蘭にて行われた際、懇親会で『室蘭文学館の会』の会員でもいらっしやる貴会の東延江様に、三村美代子港の文学館館長のお引き合

せでお目にかかることができました。そこで東様から『室蘭市港の文学館』の設立運動を参考にして進めてこられた八年余りの運動が実を結び、いよいよ『旭川文学資料館』が設立されることになったというお話を伺ったわけです。これはぜひとも交流会を持ちたいと思い、二〇一〇年度の事業計画に組み込む方向で進めたいと思いましたが宜しいでしょうかとおたずねしたところ、とても好意的なお返事をいただき心強く感じたことを記憶しております。

小笠原治嘉室蘭文芸協会会長にもお話をしたところ、室蘭文学館の会の人達にも声を掛けて、ぜひ実現させようということになりました。理事会、総会での承認も得て事業としての交流会に至ったわけです。

ここで、少し、室蘭文芸協会と室蘭文学館の会、及び室蘭市港の文学館との関係についてお話をさせていただきますと思います。私も室蘭文芸協会は基本的には「書き手」の個人加入による団体ですが、協会の大半が室蘭文学館の会の会員でもあります。また、港の文学館で行われる企画展や朗読会、支援バザー等多くの事業は文芸協会との共催で行われ、室蘭において両者は車の両輪のような結び付きで活動しているのです。港の文学館についてはご存じの方も多いと思いますので簡単に沿革をご紹介します。留めませんが、一九八二年に始まった設立期成会の運動が一九八八年に市立図書館附属文学資料館の設置という形で実を結びました。二〇〇四年には「室蘭市港の文学館設置条例」が成立し、初代館長には当初から設立運動を実践され、リードしてこられた樋口游魚さんが委嘱され、二〇〇七年には後任館長として三村美代子さんが就任されて現在に至っております。室蘭と同様

の公立民営という形で『旭川文学資料館』が設立される過程で、室蘭での成功が少しでも「心の支え」になれていたとしたらとても嬉しく思います。

今回の貴会との交流会には文学館の会のボランティアの方は都合がつかず残念でしたが、小林正明室蘭文学館の会事務局長も含め一六名が参加いたしました。準備段階から東延江様には、当方のワガママを広いお心で受け止めていただき一方ならぬご苦労とご迷惑をおかけいたし、誠に申し訳なく思っております。当日は、相川正志会長を始め会員の皆様から心温まるおもてなしをいただき参加者一同、深く感謝をいたしております。

展示室を見学させていただいた第一感は何もなくて天井が高いということでした。青少年科学館という展示用に設計された施設を使用できたことは大きな利点だと思います。延べ床面積も広く、なおかつ展示スペースの広さに負けない内容の濃い展示をされている貴会の力量にも感じました。保管スペースや作業スペースもしっかりと確保されていて、うらやましいという思いが湧いたのも事実です。

なお、私にとって最大の「成果」は杏澤章俊様と知り合えたことだと思っております。室蘭文芸協会では還暦の私が「若手」で、特に「若い男性の書き手」と話をしようにもどこにもいないという状況にあります。展示室を案内していただいた折にも、懇親会の折にも杏澤様と親しくお話をすることができました。室蘭に帰ってすぐ、杏澤様から「エネルギーギッシュな室蘭の人から刺激を受けた」旨の好意に満ちたEメールをいただきました。呑み会の時だけエネルギーギッシュで皆様にご迷惑をお掛けしたのではない



2005(平成17)年12月、室蘭市港の文学館より板東三百の資料608点が寄贈され、現在当館で展示されています。



旭川文学資料館・板東三百コーナー



懇親会
スナツプ



かと、今でもヒヤヒヤしております。どうか、これに懲りず今後とも貴会との交流を続けられたいと、改めてお願い申し上げます。

平成二十二年度・第13回旭川文学資料展
『佐藤喜一展』好評裡に終了

六月二十六日〜八月一日、井上靖記念館にて「旭川の文学を育んだ―佐藤喜一展」を開催。記念講演は片山晴夫氏『佐藤喜一の人と作品』(6/27)、石川郁夫氏『佐藤喜一の作品を読む』(8/1)。多くの参加者、観覧者を得て好評裡に終了。写真等資料を貸していただいた佐藤喜一氏御息女(長女)の織田典子様より寄稿いただきました。

父の思い出

織田 典子

父の思い出を、といわれても、強烈なことしか、思いだせない。

学校から帰ると、着物にきがえて、正座で、片手に本というすがた。夕食後、かならず少しの時間、室のすみで横になっている。

私が幼児の時、雪の中庭に、ほおりなげ(きつと泣いてうるさかったのでしょう)泣いて、はつてもどつてきた赤ん坊を再度、ほおりなげたとか “そういうことを平気でやる人だよ”と母。おんこうで、静かな人と、外では思われていただろうけど…。

たしかに家でも、口数はすくない人だった。私が、もうすこし大きくなった頃、食事時の茶ブ台を、ひっくりかえして“サイナラ”とでていく。夜になって、何もなかったかの様に帰ってくる。(昔の父親がよくやった風景?)それも、食べ終わりがけか、食べ始める時ではない、何というか、今考えると絶妙なタイミングだったのかもしれない。又、家の果物ナイフの先が、みんなおれてい

るのは、父が柱か茶ダンスに、ブツとさして、子供たちをふるえあがらせる。それが、2〜3m先から、いい具合に飛んでささる。子供たちがなかなかなない夜などに、おこる。となりの、がたいの大きな、馬車追いのおじさんがきていた時も、それがおこり、その後、家に遊びにこられなくなる。そして、よく“あの時、先生こわかったよナ”と。家には、教え子のお兄さん(子供の私がらみ)、父の文学仲間、国籍の多いという卒業生、親セキの人等、お客さんの多い家なのに、その人たちがいない時に、そういうことがおこることが多い。又、突然おこりだすと、子供たちは、すごいいきおいで逃げだす。兄は、裸足で外へ、他は、皆おた々して、かくれる、と玄関へでて“逃げ足の速い奴だ”と、深追いはせずそれで終る。そういうことは、古い家の時で玄関前に小説懇話会の札が、かかっていた頃のことである。



家族そろって。1958(昭33)年撮影。

前列左から 佐藤喜一、行夫人、長男 泰一
後列左から 二男 穂、長女 典子、二女 汐美

今野大力を愛してやまない

佐藤比左良さん 旭川市文化功労賞受賞

佐藤比左良さんは昭和 23 年から勤務していた旭川郵便局時代、戦前に今野大力が同局に勤務しながら創作活動を行っていたことを知り、今野大力の研究をはじめました。自らも詩人として全電通詩人集団、詩人会議に所属。昭和 39 年 50 年職場詩誌「うたり」を編集発行し大力研究や詩作品を発表します。昭和 46 年には詩集『灯台』で第 4 回小熊秀雄賞を受賞。現在旭川中央図書館に所蔵の今野大力の詩稿やノートを読み解読・編集した『今野大力遺稿ノート』は貴重な研究資料として高く評価されています。

受賞、そしてこれから

佐藤 比左良



今野大力の詩を読んでもみたい、もっと読みたい、もっと知りたい、もってみたい、と思っと思っています。ここに、詩集が発行され、詩碑や、居住表示板が建ち、毎年的大力祭。最後は、「小熊秀雄・今野大力文学館」の夢が、文学資料館の大力コーナーとして実現しました。

それらにいつも、なにがしか関わって来ましたが、果たして、力を出しつくしていたかという、自信は全くありません。六十年ただ、心の隅に大力をおいていただけに、描いていた夢がすべて叶えられました。そして、この度の怖いような僥倖。受賞です。私がおも、この文学資料友の会の会員でなか

ったなら、どこからも話はなかったでしょう。まるで落穂拾いのようにささやかな、私がしてきたことを、事務局長の菅野さんが取り上げて推薦してくれなかったら。

とまどいながらも、しかし、喜んで受賞することに気持ちをきりかえたのは、私自身がそうであつたように、大力の名を知る人がふえ、旭川で育つたことを誇りに思う、そのきっかけになると考えたからです。そして、これを機会に、大力コーナーをもっと充実させたいと思つたからです。

○一年の中央図書館主催の大力展開覧ノートに「今朝、倉敷を發つて旭川駅からまっすぐにここに来ました。感動しています。倉敷N」「新婚旅行で北海道にやってきました。名前は知っていましたが、初めて自身にふれた今野大力：あの時代に、このような詩を書くなんて。神奈川T」「仕事で偶然、訪れた旭川の地で再び今野大力に会えるとは：浦和市K」など書かれていて、はるばる訪ねて来た人が感動を書き留めています。

いまは常設。あの時のような展示にして、旭川に行ったらいつでも大力に会える、期待を裏切らない、来てよかつたというコーナーに育てていきたいと思っています。あらためて菅野さんはじめ、後押しをしてくださった会員の皆さんにお礼を申し上げます。



佐藤さんが“兄貴”と慕う今野大力



贈呈式にて。

同時受賞の松田光春氏と共に。

平成22年11月3日、於旭川大雪クリスタルホール



旭川文学資料館・今野大力コーナー



今野大力詩碑

今野大力コーナー横の窓からちょうど今野大力詩碑が見える。

秋日の道北に憩う生田原文学の旅路
オホーツク文学館と文学碑公園
 旭川文学資料友の会訪問記

九月二十六日(日)、相川会長の計らいで相川病院のマイクロボスを職員の方に運転してもらい、遠軽町生田原にある「オホーツク文学館」を訪問。また文学碑公園、歌句碑ロード、ちやちやワールドにも立ち寄り、「旭川・文学の120年展」の展示作業で疲れていた心身を癒した。



12:00ジャスト現地到着。まずはホテルノースキングの食堂で腹ごしらえ



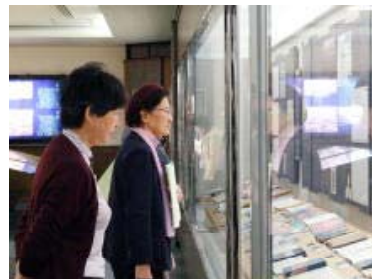
9:30、相川病院で待ち合わせ



バスに乗り込み出発！



オホーツク文学館を背景に



文学館では真剣に観覧。内容、展示方法などチェック



ちやちやワールドでは藤城清治の影絵に圧倒される



無理のないスケジュールで印象深い小旅行。秋の思い出、創作の刺激にもなりました。



三浦綾子の文学碑も



苔むす文学碑公園。いろんな形の碑が静かに佇んでいます。



NPO法人旭川文学資料友の会・設立 今後の活動に向けて

旭川文学資料友の会事務局長 菅野 浩

特定非営利活動法人旭川文学資料友の会の第一回理事会が開かれましたので、その概要を記します。

※日時・平成二十二年十二月四日(土) 午後二時から三時半。

場所・旭川市常磐館二階講堂。

出席理事・十二名(書面参加二名)、計十四名
議長・相川正志会長

議事録署名人・佐藤比左良、森内伝

※報告事項

①特定非営利活動法人設立認証・登記経過説明。
平成二十二年四月二十四日設立総会、平成二十二年五月二十八日設立認証申請、十月十九日認証。平成二十二年十一月四日法人登記、平成二十二年十一月十二日法人登記完了届。

②特別展「旭川・文学の120年展」実施報告(別紙資料による説明)。

・期間/十月一日から十月三十一日、場所/旭川文学資料館第一、第二展示室。入館者数八二五名。展示資料総計二三七六名、第一展示室九六八名(小熊秀雄関係五五八、今野大力関係一三五、板東三百関係一八〇、知里幸恵関係九五)、第二展示室一四〇八名(120年展関係五四七、小熊賞関係一二三、藤田旭山関係五二、学校文芸関係四三、サークル関係四四、各ジャンル関係五九九)。

③120年展記念講演(以下、実施日、ジャンル、

講師、演題の順)。

十月三日(日)「創作」石川郁夫氏・「冬涛」の作家たちのうち三好文夫『重い神々の下僕』を中心に。

十月十日(日)「川柳」鎌田正勝氏・川柳雑感。

十月十一日(月)「児童文学」福田洋子氏・旭川発、児童文学の魅力―絵本を中心に―。

十月十七日(日)「詩」宮川達二氏・小熊秀雄と二人の女流文学者―湯浅芳子と宮本百合子との出会―。

十月二十四日(日)「俳句」岡莊司・飯田龍太の世界。

十月三十一日(日)「短歌」竹内利和・旭川の歌碑をめぐる。

④予算決算。

予算(旭川市120年特別展開催事業業務委託料一〇二三五〇円)、決算(旭川市120年特別展開催事業一〇二三五〇円)、差引〇円。

以上の報告について承認された。

※議事

(一)当面の事務局体制。沓澤章俊を事務局次長とする。

(二)当面の活動計画。

①展示関係

・所蔵直筆原稿、色紙短冊展(平成二十二年十一月一日〜十二月二十二日)。

・百井昌男氏所蔵、教科書・ノート展(平成二十三年一月五日〜四月末)。

・第十四回旭川文学資料展・木野工展(平成二十三年五月初め〜八月末)。

・旭川俳句連盟六十周年記念展(平成二十三年九月一日〜十月三十一日)。

・旭川詩人クラブ詩画展(平成二十三年十一月一日〜十一月三十日)。

・旭川冬まつりの歩み展(百井昌男氏所蔵)(平成

二十三年十二月一日〜平成二十四年三月三十一日)。

②第二十回旭川生涯学習フェア「まなびピアあさひかわ」参加。展示/平成二十三年二月四日〜二月六日、講演/二月六日(沓澤章俊)。

③読書会。旭川の作家を読む(石川郁夫氏を中心に)、ほか。

④(十代、二十代限定)若手創作活動講座、など。以上、提案どおり承認された。

特定非営利活動法人旭川文学資料友の会の当面の課題

①旭川文学資料館の管理業務委託については現在、平成二十三年二月を目途に旭川市教育委員会と話し合い準備を進めています。現在は旭川市の嘱託職員の身分の沓澤章俊さんが、業務委託にともない当文学資料友の会の常勤職員となることに伴う、勤務規則、給与規則等々の整備など遺漏のないよう進めることが当面の大きな課題と考えています。

②理事会で承認された活動計画に従って、展示関係をとどこおりなく計画し、準備し実施してゆく必要があります。

・平成二十三年一月から四月末までの百井昌男氏所蔵、教科書・ノート展は明治時代からの資料ということで、期待しています。

・第十四回の文学資料展として現在資料整理を進めている木野工展は、新聞人としての交流の広がりや芥川賞、直木賞に6回も候補に上げられた創作活動の蓄積などの膨大な資料に圧倒されつつ、旭川出身でありながら、あまり知られていないその足跡を紹介する展示にしたいと準備

備を進めています。

・平成二十三年九月からの旭川俳句連盟六十周年記念展は、旭川における俳句の六十年の歩みを総括集大成する記念展としてたいへん期待していますし、十一月一日からの旭川詩人クラブ詩画展は市内の文芸同人展として、旭川文学資料館としては初めての試みですが、今後はこうした市民の手による展示、サークルグループ展なども積極的に取り組み、市内の結社、サークルのご協力ご支援を得ながら充実した展示を計っていきたいと考えています。

③第二十回旭川生涯学習フェア「まなびピアあさひかわ」(平成二十三年二月四日～二月六日)は旭川文学資料友の会としては初めての参加ですが、こうした市内の団体やサークルなどとも交流の輪を広げ、積極的に旭川文学資料館の事業をPRして行きたいと考えています。二月六日には沓澤章俊事務局次長が講演する予定です。④旭川の作家を読むなどの読書会や若手創作活動講座や講演会なども、今後の活動の課題と考えています。また、理事会で話題となった出版事業についても、旭川の書き手を掘り起こし、旭川ゆかり(出身)の文学者に光をあてる試みができれば、たいへん意義深い事業の取り組みになると考えています。

事務局より報告

特別企画展「旭川・文学の120年展」(10月1～31日)は成功裡に終了しました。企画立案、予算見積、什器の手配、資料の移動、仕分け、展示物・キャプション



作り、展示作業、ポスター・チラシ配布、等々、友の会のメンバー一丸となつてがんばりました。それぞれお忙しい中、連日作業していただいた方々にあらためて感謝申し上げます。また各文学ジャンルの方々にも展示、受付等、この上ないご協力をいただきまして、本当にありがとうございます。記念講演におきましても、快く講師、司会、受付等を引き受けてくださり心からお礼申し上げます。



展示点数は約二三七六点、期間中の延べ観覧者数は八二五名でした。十月六日には井上靖の御息女・浦城幾世さん、黒田佳子さんが観覧。七日には児童文学者の加藤多一さん。また十四日に、引率の先生と共に市内の広陵中学校一年生32名、永山中学校生徒5名。十六日には室蘭文芸協会会員16名。二十一日には西神楽中学校生徒60名、また期間後の十一月十二日にも総合学習の時間ということで先生と共に永山南中学校生30名が観覧しました。小中学校の生徒の来館はうれしにかぎり、ちよつと展示内容はむずかしかつたかも知れませんが、こういう所があるということ、頭の片隅にでも留めてくれればありがたいと思います。

展示室・感想ノートより抜粋

・旭川の写真をなつかしく見せて頂きました。父が小学校の教師をしていたので、書物がたくさんありました。5年前に亡くなり本も惜しみ

ながら処分しましたが、こんな風な展示場所があることがわかっていたら、きつと持ってこれたのにと思いました。残念です。・小熊秀雄コーナーのコピー写真の色合いがどうも不自然に思いました。原本の色で古さを感じたかったです。少し残念です。(すみません、早急に作り直します「事務局」)。

・このような文学資料がある事を旭川の小中学生にぜひ広めてほしい。若い人達がこのうえにさらに花を咲かせるためにも。

・これほどのものだと、知りませんでした。みんな、手弁当で心と心と心とで作らあげた、そのみごとさは、ひしひしと、わが老骸に伝わってくるのであります。

・私にとって3回目。係の方が開館時間(曜日)や展示の期間や内容について教えて下さったので、日にちを分けてゆつくり見ることが出来て、今回は童話を読ませて頂きました。前に親しみを抱いたことのある絵があつたり、学びもあり、癒しもある。とてもバラエティ豊かな本が沢山あつて嬉しく素晴らしいと思います。ここでの時間は私にとってよるこびであり、これからも増えていくと思つて、また来させて頂きたいです。

以上、種々の感想をいただきました。ありがとうございます。まだまだ不十分などころがあるかも知れませんが、今後より親しまれる文学資料館を目指す所存です。

また、この度、会場入口に「旭川文学資料館」の内看板が出来ました。板は企画計画デザイン・ハギヤ代表の萩谷洋介さん提供。文字は書家・石川博一さんの書です。



友の会・文学資料調査事務局・近況報告

本年六月から十一月末まで、追加された資料の一部を紹介いたします。

収集・提供いただいた資料本の数々

文学資料調査事務局 沓澤 章俊

・菊田一夫『リラの花忘れじ』。旭川近文のアイヌ問題を背景の一つとして描く。

・『天塩町史』『当麻百年史』『東神楽百年史』。

・詩誌『コスモス』(一九七九年十月、中野重治記念)。

・『早稲田文学』昭和二十七年十月。佐藤喜一『朔風』同人から掲載。

・小熊秀雄詩稿「天上の物」(コピー)。

・奥山寿(ひさし)フランス語詩集。

・宮川達二「サハリン島―詩人への旅―」(紀行文)。

・藤田旭山ご子息藤田尚久氏より寄贈、俳句関係本多数。俳誌『雪舟』、『木の芽』他、比良暮雪『北海道俳壇史』(昭二十二)、旭川工業高校文芸誌『旭工文学』、『苔の花』、上川郡当麻村発行俳誌『山百合』ほか。

・宮崎二三子詩集『命いまを重ねて』、直筆原稿他。

・大野信夫『戦争とは何か―第一線で戦った兵士の記録』(小冊子)。

・文芸同人誌『海塔』二十二号。片山礼子「有島武郎の短歌についての小稿」他。

・詩歌誌『愛誦』大正十六(一九二七)年一月号。西條八十主宰。東京・交蘭社発行。下村保太郎の詩、海老名礼太の詩、散文、短歌掲載。

・『女性史研究ほっかいどう』第四号。中村一枝「知里ナミの足跡を辿る―元バイブルウーマン金

成サロメ 知里姉弟の母として―、岸伸子「社会運動家を志した保健婦 棧敷よし子への“旅”」他。

・同人俳誌『樅』十三号。江別発行。

・日本・ネパール合同詩集『花束』第IV集。第三十九回小熊秀雄賞受賞者水島美津江さんの作品掲載。

・石坂千鳥遺句集『淀む人生』。石坂千鳥(本名義政、一九二〇―一九七二)は旭川川柳社元同人。

旭川市神居の自宅に自らの川柳句碑を建立。

・金坂吉晃筆の歌書。

・石川郁夫『季の周辺漫歩』。俳誌『舷燈』誌上に掲載された文章をまとめたもの。

・文芸同人誌『PETANU』十三号。

・道齋茂樹作絵画二点。「祝杯」、「久弥さんのお茶屋」(五十嵐久弥宅を描いたもの)。

・木野工夫人與子(ともこ)さんより寄贈、木野工関係資料多数。著書『凍雪』『小説 グランプリ(スビードに賭ける男たち)』『檻樓』『樹と雪と甲虫と』『旭川中島遊郭』他。本人直筆原稿五十八点、

作品掲載誌三百十点。写真五十四点。その他、旧制旭川中学時代の作文帳。佐藤春夫、大宅壮一、

井上靖、芥川比呂志、森田たま、原田康子等の直筆原稿。難波田龍起、丸木俊の絵画ほか。

・日本歌人クラブ会誌『風』一六一、一六七号。

細谷弘治さんの作品掲載。

・写真集『保存版ふるさと旭川』。監修・松下實、執筆・金巻鎮雄。旭川開村一二〇周年記念出版。

・立野茂著書。『ノモンハン―旭川第7師団の兵士の戦い―』詩集『自画像』『村山芳子の日記』他。

・山崎有信著書。『幕末血涙史』『幕末秘録』『本

田親美翁傳』『大鳥圭介南柯紀行』。いずれも戦前発行。著者の山崎有信氏は旭川で弁護士をしていた。

・小熊秀雄賞贈呈式パンフレット(四一―四三回)、会報『しゃべり捲れ』(一―六号)。

・高橋幸一歌集『山住み』。

・小笠原治嘉(ひろよし)『斎藤喜博物語』『黄砂にのつてきた孫悟空』『西遊記』の研究』『石森延男論考』。著者は室蘭文芸協会会長、児童文学・中国文学研究者。

・詩誌『詩邦人』六、七号。室蘭発行。

・俳誌『万葉』一〇〇号。

・高取素城句集『葉隠』。著者は「ゆく春」の室積徂春門下。

・旭川歌人クラブ発行『旭川歌壇』十二号。

・柚木衆三直筆原稿、深田久弥ハガキ他。

・『月刊文章』昭和十四年五月号。板東三百「門道」掲載。

・北見弟花色紙「零下三十度川あたくかく村に着久」。

・旭川のふだん記関係本多数。

・俳句関係短冊。大塚千々二、藤田旭山、塩野谷秋風、高橋貞俊、伊藤雪女、後藤軒太郎他。新明紫明、セツ子色紙、短冊等。

その他、旭川、道内関係の詩集や詩誌、句集、俳誌等多数寄贈いただきました。ありがとうございます。

友の会人事動向 (かっこ内紹介者・敬称略)

【新入会員】織田典子。高田雍介。久居智子、原田光幸、熊谷節子(山口敬子)。三浦富子(松尾宏子)。古家昌伸。駒井悦子、黒川友子、宮崎カツ子(西川良子)。小川朋子(東延江)。有川正子。

【退会者】小原祥子。八重樫美代子。

【ご逝去】二〇一〇年十月二十二日没・橋本和道様。